

中学校運動部活動において大学生外部指導者が抱く課題に関する研究

－H市の部活動アシスタント制度を事例として－

藤島 慶人（広島大学）

1. 目的

本研究の目的は、H市における大学生外部指導者を活用している部活動アシスタント制度を事例として、運動部活動における大学生外部指導者が抱く課題について明らかにすることであった。

2. 研究方法

対象者は、H市で実施されている部活動アシスタント制度において、実際に派遣されている大学生外部指導者2名であった。調査時期は2024年11月18日と12月2日であった。調査方法としては、半構造化インタビューを採用した。主な調査内容は、指導する中で抱く課題と指導する上で取り巻く環境に対して抱く課題であった。分析方法として質的分析方法であるSCAT分析（大谷、2019）を用いた。

3. 結果と考察

大学生外部指導者指導する中で抱く課題の一つ目として、生徒の競技レベルに合わせた指導における課題が挙げられた。大学生Aは、自分が所属していた高い競技レベルの環境と、指導対象である中学生の競技レベルの違いによる指導方法に難しさを感じていた。大学生Bは顧問教員から、高い競技レベルでの指導を期待されたものの、中学生にどの程度の技術を教えるべきかについて迷いを感じていた。したがって、生徒の実態も踏まえながら生徒に適切なレベルの指導方法を検討していくことが重要であると考えられる。二つ目に、部活動への熱意についての課題が挙げられた。大学生Aは、生徒たちが盛り上がる部活動を知らないことによる、部活動の活気のなさに悩んでいたため、自身が所属する大学の部活動に生徒を招いて、一緒に練習するという方法を取り入れた。この取り組みを通じて、生徒は大学における部活動

の熱気や本気度を肌で感じ、部活動への意識を高めることができた。一方、大学生Bは、顧問教員と生徒の部活動との間にある、部活動への熱意の差に悩みを抱えており、どのように指導すれば良いか困惑していた。

指導する上で取り巻く環境に関する課題として大学生外部指導者と顧問教員との関係について挙げられた。大学生AとB共に顧問教員に対する不満や意見を有していたが、それを顧問教員に伝えることが出来ていなかったため、顧問教員とのコミュニケーション不足が大学生の指導における大きな課題となっていることが窺えた。

4. 結論

本研究の結果、大学生外部指導者が中学校運動部活動を指導する中で抱く課題として、生徒の競技レベルに合わせた指導、並びに部活動への熱意が挙げられることが明らかになった。また、指導する上で取り巻く環境に関しての課題として、顧問教員との関係性、部活動への熱意が挙げられた。

5. 主な参考文献

- 1) 青柳健隆・石井香織・柴田愛・荒井弘和・岡浩一郎（2014）運動部活動での地域人材活用におけるモデルケース比較分析. SSF スポーツ政策研究, (3) 1 : 257－264.
- 2) 青柳健隆・石井香織・柴田愛・荒井弘和・深町花子・岡浩一郎（2015）運動部活動での外部指導者活用に向けた組織的実践の長所と問題点：異なる実践モデルに対する教員の評価. 体育学研究, 60 : 783－792.